

新光
 話 瀟
 多滿
 宇
 善
 四篇

^ 13
 3226
 4 止



門 へ 1
3226
4

昭和十年七月十日
田中謙次

光濤 新話 多満宇佐喜四編序

玉鬼を祓く 暦より十五夜のおのろけ

程の空をみ 疵ありと 祓けたる 古人の

秀逸なる 似るや 似ざるや とききし 年

月の桂枝川水より 憶ひ 葎せし 玉

鬼をねて 趣向であらうもの 婦幼稚

童の愛を得て自己が毛程の疵も無く
總ておのり光博新結走るか佐尔
採る筆は月よもあはれ修学讀策
子今巻中の美人等を掃娥年
よそへ桂男ふあぢと半と附會
て我々恥をさらしあはれ自打著書

そり延きご作者の鼻の下なご
婉捨山と捨る多らげ猶も愛顧を
死なまらん

名月やすぐに
巻く多た姫小松

東都戲作者 為永春水誌



山崎とていつと
まきの
とせられつ
と花の夜
重
重

松仙





廣重

捧入
猫小
おの
おの
おの





夜更
 静里
 梅好
 さうり
 かたよ

修
 重
 五

光濤
 新話
 夏満宇佐喜卷之十一
 一名准於半

江戸
 狂訓亭主人著

第十九回

再説錦次郎
 包丁金と錦次郎
 きんのお在の裏之用が
 家づら
 先束

再説 錦次郎の金と錦次郎の女
 包丁金と錦次郎の女
 きんのお在の裏之用が
 家づら
 先束

号名氏ごそのご子 錦ハイ左衛門でござるまはるが御縁して
交をおあきんハ四存おでござるまはる 女ハ実ハ秘も
佐々木の室中で片岡幸を交の娘で名をお幸と稱す
ふト同七 錦次郎へおごるま顔 錦ハイイそとあら
お腰ハ片岡まの四娘子まの遠いひご方ませぬ
きハヤお故き程お怖りしてお同ご 錦ハ正他のみで
お腰ハお腰がそのお幸まの遠い
あけまごお團次ハ四郎居のまご 貞松院まの
お腰ハお出生まのこお腰まの當主の殿まののお姉
上まのまのまのものを驚くので 何とていへませう
実正のお身の上まの御程くお在まごまの
五郎みとお在まごまの

そまのけお幸の身の上を委しくお承説ある
其の綾織錦左衛門の古王當時の主なりける様
本判官の父上 佐々木 近江前司ハ佐々木家の
知山縁の家の二男めて実ハ負しき身の上にて

けりける頃お貞とて侍女のみを分けて
 身せさせけるが父の御前の外に
 せよ腹一けきども姪身もまは
 まるまをその侍女とるまのま
 本家の童奴片岡幸を父の家の親
 出入とめりけるゆゑ彼二男の種
 やどしる小児を養ふも苦ふべき
 ころ時直ふ貫ひて育つるふり
 お貞の種も善殿を養ひて
 勤ら在りけるころ片岡幸を父
 四身赤とまり家名断絶ぬ
 途方どうも極まり行儀織錦
 実意ふ世話をしとよむる役
 お幸とらつたのまの生田分
 るんごとも當田家の血脈
 りのとあ幸のなる幸とまの

けりける頃お貞とて侍女のみを分けて
 身せさせけるが父の御前の外に
 せよ腹一けきども姪身もまは
 まるまをその侍女とるまのま
 本家の童奴片岡幸を父の家の親
 出入とめりけるゆゑ彼二男の種
 やどしる小児を養ふも苦ふべき
 ころ時直ふ貫ひて育つるふり
 お貞の種も善殿を養ひて
 勤ら在りけるころ片岡幸を父
 四身赤とまり家名断絶ぬ
 途方どうも極まり行儀織錦
 実意ふ世話をしとよむる役
 お幸とらつたのまの生田分
 るんごとも當田家の血脈
 りのとあ幸のなる幸とまの

賜つものさう金も百五十兩と妻ふふもさうあはれ計ひ
町家の敷頭片岡を幸ひ常々いひの方へ引

取らせしかき序岡をとりよの頼母しくね奴故の
幸直美の後家の養女お事を建て序岡をさる

音信不通あり遠く田舎へ引込けまぶ久しなる
きりあきを知る者なくまじよう後家と娘の程の

るあつて年月をこしけまぶ後家の養女を大
切ふ育るあきと出時の家賊と棄し金銀亦

百五十兩の金ももたふ貯入の事お章が成
長と今あいつらもたふ不自中なく養母に死別れて

後他人のなる侮らまじと男のなるよろしく
あもまき風俗を繕ひ他見を然もいつらぐましく

乃せしるべき底意をあらぬりの歌もさ味を海
せま丸もたらしと娘の時きととて命も命か
男の思ひがけなく本家の急養子とあつ直る
督を建て佐々木近江のあきと中お直をお部

さると稱へさせ再度姫身と當主佐々木判
官を奉せしが程なく若狭の病氣をもせられ世を
去るまじき後織錦左衛門の選言の門で里方御
侍の時ふか貞が産み女子を行岡幸吉の養女
せのせしが牛後幸吉の家の終絶と今人殺
害の罪が初孫おまじ判官が若狭も同様の
事なれば是れを尋ね知し我は後の道とせしめ
と言われしが若狭世を去るゆゑに同様に後織

氏に彼行岡の養の娘實の近江の若狭の姫君於
幸吉の初孫おまじ判官が若狭も同様の
年月をさると同様に後織親子も若狭にけしむとの
ことを後にも詮穿する人も多く當主判官の
病氣も若狭に家老一門の族の我喜を授け
か貞どのをも内國元の住居に貞松院と申せ
まう此程佐々木の判官病氣初孫おまじ判
官と遠く聰明才智の若狭とをせられし



きりぎりすの
こゝろの
あはれ
新里

幸ハコヤクキモ極る芝居の程言の極る身の上の如く
このがお腹さぬが度世の福抱せしめて洗ひ髪は其本
の端をさうて罌りの揚枝せしめくらにて居らば類
見世の二番目の極ぞ可笑のみ 錦ハイ至そ且も其正の
幸ハアレサキ極る野暮の終は成ナキ一程のお茶の
茶師のおんのお彩で母子と路は小さまよのどお新
樂ふしと居るのどろくを因返しおそのお金を上る
持て行て上てお号まず 實にお茶の隣の家へ行て居る
節ふ金を終失てと氣を悩んでお在の所を見も圓
まて跡も圓あるお茶の名氏中て圓席けさう形ある
途申もまて言ひなると言ひけとお茶を此新まて
来このさう遠くおせよそのお金の何事お茶の
新へ持て行てあげてお号するそのヨも 他所へ使
お金を返ること上るトの思て孝子錦次郎欲
のいふもさるけさう幸老なる父の駈入盡し丹誠苦
んの大金を終失はるる力落し且の當時病者の

申さまを細く在まらんて一園を返まておれが
時々の金を借用ひて父の金を休めせんうと思案の
申ふとや小女が逃下酒肴蒲焼みんどこづく持
あがりしづぐ 幸一サクく 錦まん 鱧の冷きひうちめは
かゝるお口さん ひとのヨ 錦一エを振ひうしうてけね
川池きぬありのましとん 幸一サクく けいも 池きまるとり
程のりてのあいのヨ ササヤやく あうりヨそと今我の爺は
まんが お案づ じゆりうり けいも せやく お帰るまき代り
と

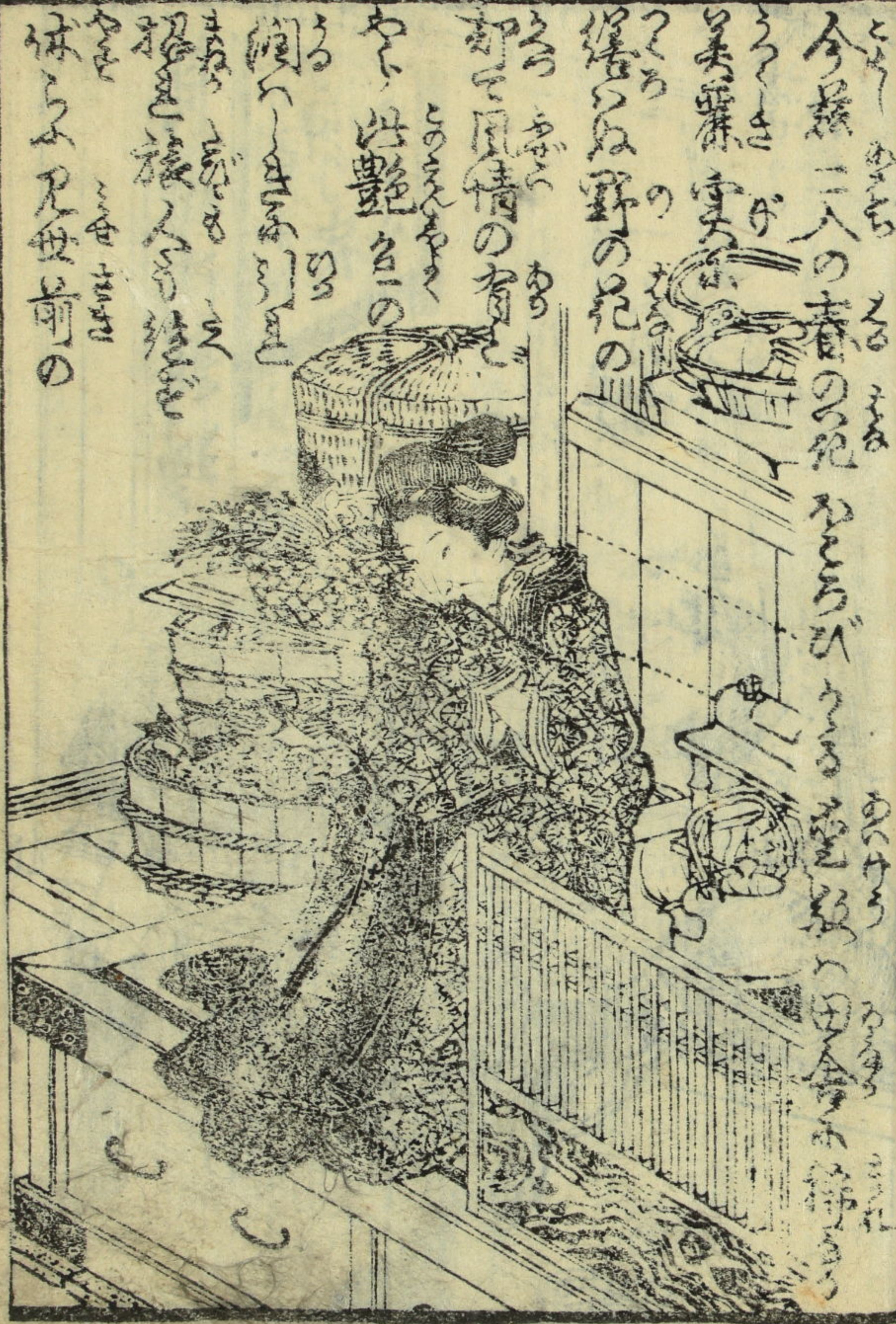
今我宅へお帰りの上を 爺とさんお私かひりて居る
るを妻しく出してお口さん けいも 池きまるとり
きんぐら 幸一サクく 身の上のけいも 池きまるとり
さめてお口さん けいも 池きまるとり 頼んでお口さん
まへにモウを伴ひてしる 直の出しと園をまた今今の
かへかぶあの方の便りがあしめあはせなうし
まかせなうが 爺さん けいも 池きまるとり けいも 池きまるとり
養うましづぐ けいも 池きまるとり けいも 池きまるとり

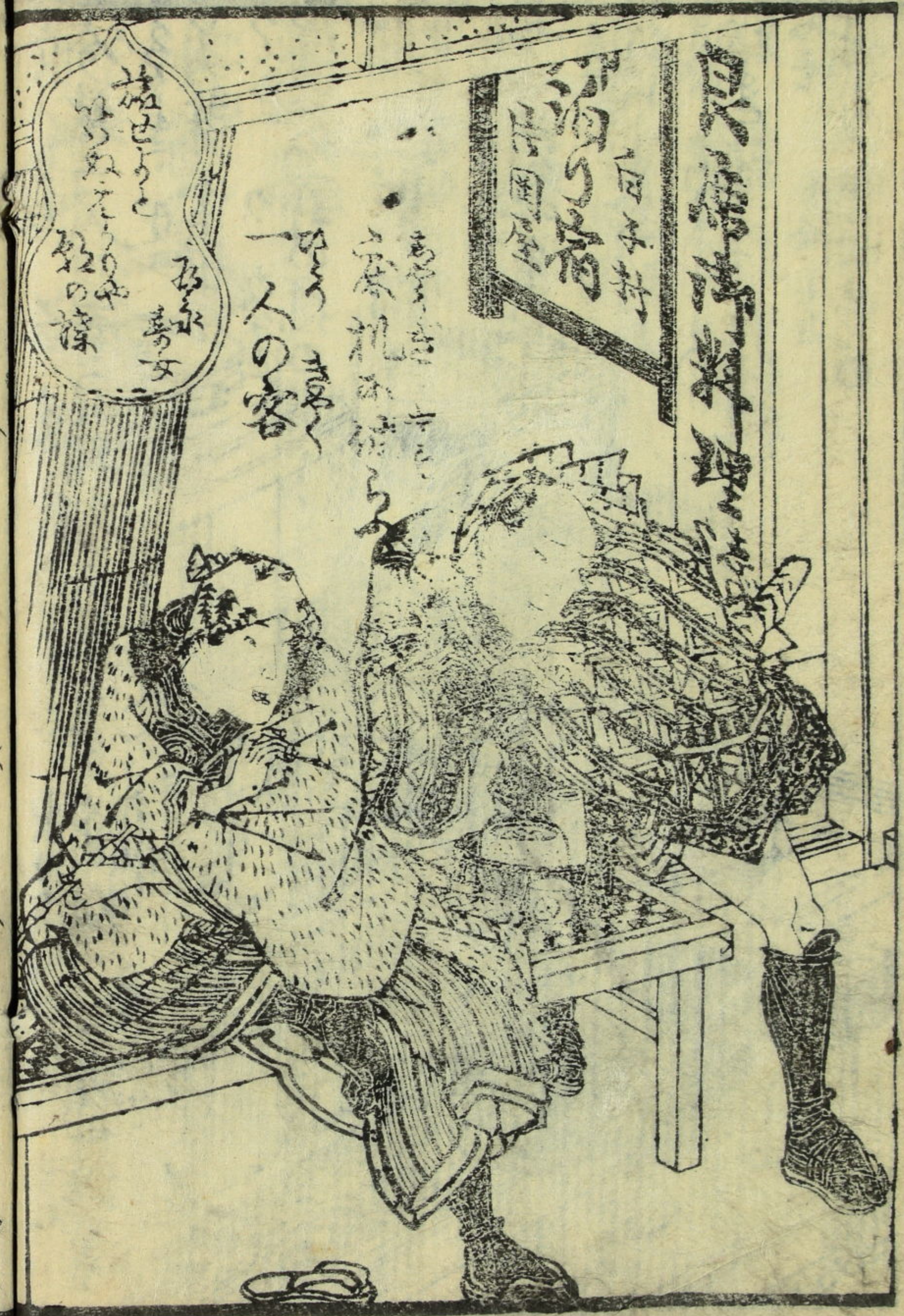
恋慕ども男の身を痛ら逃くもその女に逃ぬ
極小なる類ひも多けり男も女も美態を憐む
ていへく 伴況のふれ世の宿業は皆とてく 宣まうー
物束のこのふれたり 彼安んを恋慕とて蛇身とて
家婦の 一の 女の 一念の 善悪とも 執着深まののふれ男の 懲る
懲るがまじらざる 念ふが 文章が 錦活座をのむぬ
最後は 青紙の 似るども 然るめいぞその 初め

思ひをうける 男の 差別且その後 絶て 思ふ男と見らる
かきあうらうが 事久しき 中の 年を 還入 その 入の 入の
めで 猶同しき 錦活座 多うの 暮の 母より 團圓
えー 後藏氏の ふれ息との 恩と 情合との 實
めで 深く 恋慕の 極め ありけるも 念く 恋慕の 情人の
執着心が 錦活座と 文章の ようて 念を 回さんと する
因縁の 所あり ありふれ 文章の 情合 ありー 是の 事の
この 記し 七 錦活座を 看官の 昔の ありふれ

左の如し

世の中絶て樓のまう其春の心は長閑うらやま
 遊春一哥の心はまう花の秋はく人かうま立立
 春の夜はまう中甸のうらまは武藏國新倉那
 白子村の心はまうゆり順路めて茶を旅先
 名か國をうらまは花の宿中ゆりゆり順路めて茶を
 旅宿のまう心はまうまう小休の人かゆりまう
 毫相よく及でまうまう一個の娘各片園の心華





一人の客
 客一人
 一人の客

花はよこ
 花はよこ
 花はよこ

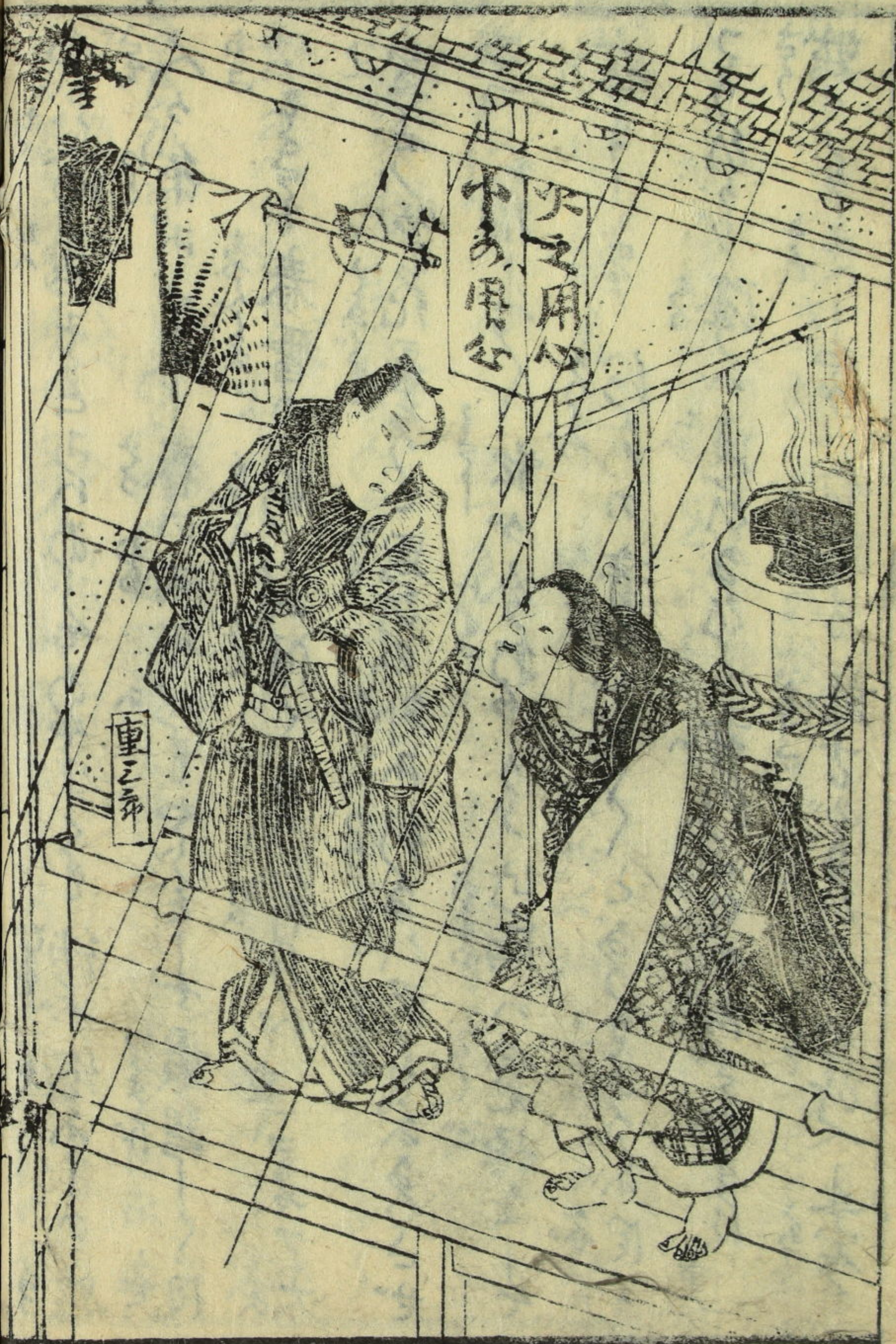
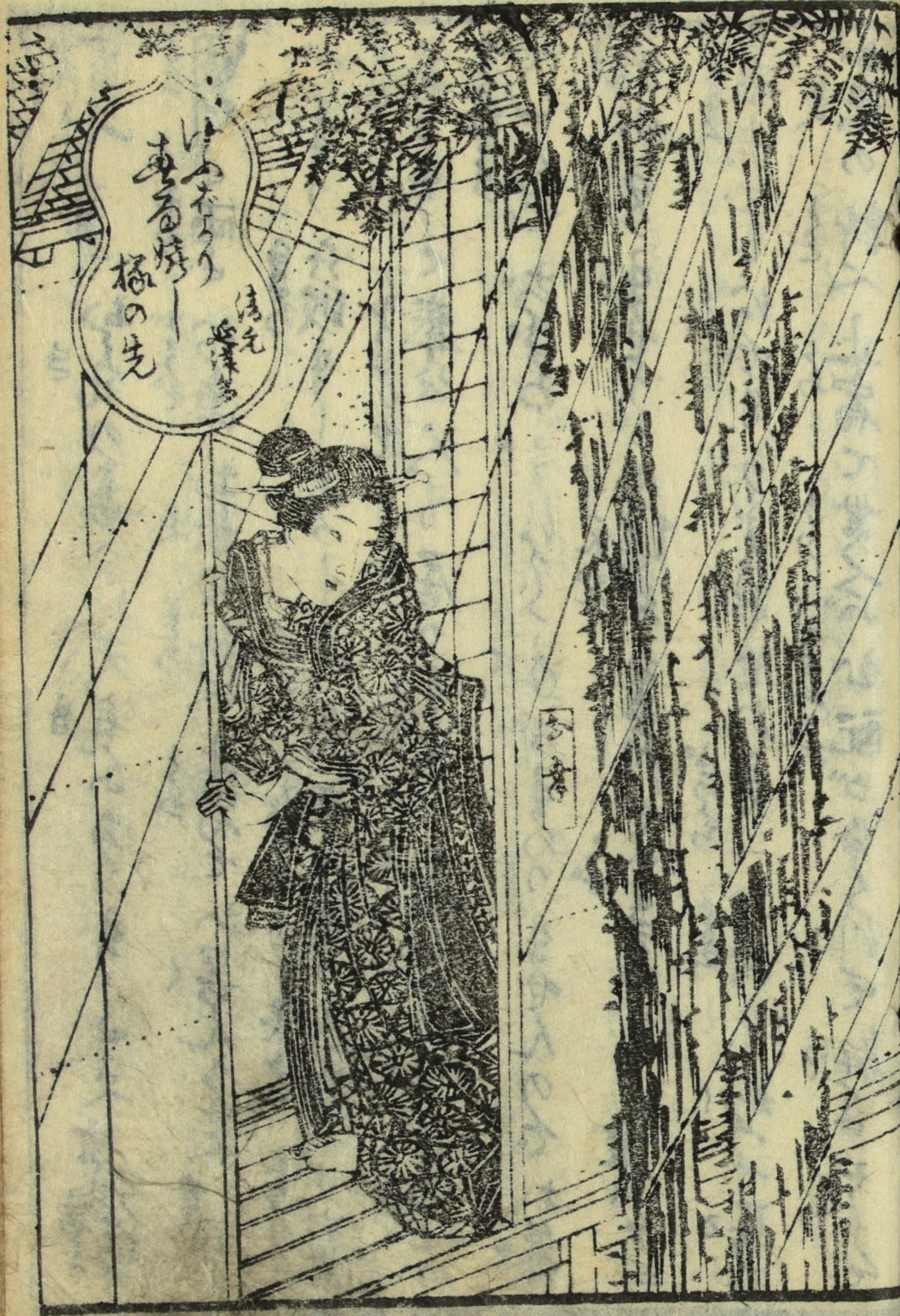
鎌倉風の息も様 相成の商人と云ふよすがの男
 あゆみの荷を持せて 主従ともみ腰をうける 客ト主トモ
 何時ぞいふも 世もハライ空甲午時であらるまをう 客ト主トモ
 理で空腹さか幸々もく血版と出して 果を渡りけはるまを
 考行り人ぢぢぢぢぢぢぢぢ 考ハ貴さるの翁もまをハ
 お茶請けの 茶も産ませんり 幸ナアニ 備戸 野中屋とらて
 返して引又で用を測て 支々おんおんおんおんおんおんおんおん
 左様ぞおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおんおん

お通うでござらぬお母さま
何卒お母さまへ又お報告を
お成すはねお願ひの中へ戻す
近うお出づ
らてよま戻す言類を男の情
男へお前へおのを解ふ久し
お母さんへ表町の小間物屋
お新屋の重へお幸さんで
お通うでござらぬお母さま
久しお目よりらまおせんト
十二三の時より七を所の娘
あて今う盛りの姿ゆき
見惚つるお持烟の姿と
まおくお治常おまお
まそくおておの仲お
男と係違ふおまお
たるお情お言事お

お通うでござらぬお母さま
何卒お母さまへ又お報告を
お成すはねお願ひの中へ戻す
近うお出づ
らてよま戻す言類を男の情
男へお前へおのを解ふ久し
お母さんへ表町の小間物屋
お新屋の重へお幸さんで
お通うでござらぬお母さま
久しお目よりらまおせんト
十二三の時より七を所の娘
あて今う盛りの姿ゆき
見惚つるお持烟の姿と
まおくお治常おまお
まそくおておの仲お
男と係違ふおまお
たるお情お言事お

たり 重トキニ 新七春のぬらふまゝがぶらぶらと太り
ぶらぶらなるぬらふまゝがぶらぶらと太り
もどろもどろも止みと 今日のは所へお止宿
まじり 重トキニ 新ハなまじり 重トキニ 新ハなまじり
と雨が降るまじりのラ 重トキニ 新ハなまじり
新ハなまじりもす 新のやまじり通り 今日新ハは所へお止宿
るまじりもす トの所へ二膳の食をりて持来るのまじり
人の昼飯を冷や居る中へ降おしる 春雨や記のなる

雨の父の園をまじりぬらふまゝがぶらぶらと太り
人の糸糸とまじり春の雨の似もやまじり
吹きまじり春雷のぬらふまゝがぶらぶらと太り
新ハなまじりもす 新のやまじり通り 今日新ハは所へお止宿
まじりもす トの所へ二膳の食をりて持来るのまじり
人の昼飯を冷や居る中へ降おしる 春雨や記のなる



昔々人 幸へお礼の毒をお天気ふりまへるしよへ車左様
 雨の雨どい草お茶の所へ止宿てお号んせん 幸ハイ
 おとまりひ成すーあー今日お母人孫が顔へ止宿よ
 春うまて奉公人も居るまをきご 雇ひの男と召仕の
 女一人ぞおきあまひさうなまのりまをんのぞお藤
 志ふりのまをうが 由儀おき門てまをるまー 車カアニ
 藤末でもちぞのりまひやせぬ才一ひあうふあつて居る
 お茶の所へ止宿て葉へお配がき門て解るそへ

子久しぶらぶらお茶が 鎌倉居る時の由へおは
 せう思ひがけをいねへ新でお目お樹門へまへ幸か二
 夏の花で移るまうく嬉しく門て 車マが嬉しくいへ
 トお所へ給仕の女が茶を持門て来る 幸マお茶をの
 お別れの目ねさるでおきかまはるまを 小やアまご
 お嬉しくいごごるまをせうトのりまてお茶の顔赤らる
 幸ママ奥の彦後へ雨が降込む格ご戸とたて
 幸う久 幸へア然うまを門ておきまーまごる春の

雨ハ花の雨とやらござらば此も濡れも仕も仕も
まは子へト笑ひまらりつゝお幸のまを圓外り
お是を終ると極側のり久 幸ハハイサ極の濡るのり
嬉しひりてらぶるもせんり 幸ハよくお賤へつゝ不
分解するなりお言ひよト奥のなき愛の方へ行く童
三郎の給仕とせるお賤との女と着てお是へけ新等の
お人トやうまひ子何様も 朝きひや風俗の此土地の人の
極へつゝひま 幸ハラ中々ト此土地の者をあきらまはるが

久しく貴者の市を所不居りまらば此家のお幸さん
まは以てお多し居りまはる貴者の市に小る物を
賞ふお多し居りまはるお顔を存せ居りまはるヨその時を
半若の市を所のお娘のさん達を幸さんくお備を成て
不残貴者お物とお在るおまはるかまらばヨホ 新 旦那
今度おは三お奢りりまらばまらば新七が星派の家へおとる
つゝお多し極不為とも同様おまはるまはる重しそれへ随分
奢る極多終りかひのつゝお馳奔も仕極多つゝ流お

でも化されと振るものヲ 新ハサ美羅統きんハ化なるも
樂しむとておぼろまはのサアとわく言くハ玉藻ホさん
そとのふ美羅統きんハ何卒ト化さる夜と顔のそも
け新七もア玉藻ホの方で逃出ト寄付ハはませり
林葉さぬとと王さぬととのみ所で化しもさるし
安部の保名ハ極上好男と信田の統が昔の葉小にて
保名の女房ハさのて安部の晴明とよト者の名んを
産むとておぼろまはせんり 幸ハ美羅統きんハ野統で

大ふも退々ハらむるむろとと新ハサ美羅統きんハト言ひまら
食のの候一膳を引そわく 新ハサ美羅統きんハト言ひまら
おとせの女ハ海原のたてがみかまも重ハさるべサ
おぼろまはの女ハおぼろまはの女ハおぼろまはの女ハ
居るそとと 幸ハアノウお止宿まらるるも奥の産
安ハおぼろまはの女ハおぼろまはの女ハおぼろまはの女ハ
おぼろまはの女ハおぼろまはの女ハおぼろまはの女ハ
おぼろまはの女ハおぼろまはの女ハおぼろまはの女ハ
おぼろまはの女ハおぼろまはの女ハおぼろまはの女ハ

履（う）ぞろ（ぞろ）造（ぞう）仍（じやう）へ（へ）ま（ま）ト（と）足（あし）袋（ふくろ）を（を）脱（ぬ）で（で）砂（すな）ら（ら）拂（はら）ひ（ひ）奥（おく）へ
通（と）れ（れ）ば（ば）新（あらた）七（しち）も（も）足（あし）を（を）洗（あら）ひ（ひ）臭（くさ）い（い）く（く）か（か）幸（さい）ふ（ふ）何（なに）の（の）も（も）と
精（せい）し（し）顔（かほ）ふ（ふ）お（お）毛（け）敷（しき）を（を）ふ（ふ）く（く）む（む）き（き）匂（にお）い（い）春（はる）の（の）花（はな）わ（わ）と（と）ろ（ろ）び
うる（うる）潤（うる）色（いろ）重（おも）三（さん）帛（ぼく）の（の）居（ゐ）る（る）度（ど）後（ご）へ（へ）幾（いく）と（と）夜（よ）通（と）く（く）火（ひ）の（の）給（たま）仕（し）
幸（さい）ふ（ふ）ん（ん）ど（ど）出（で）用（よう）の（の）お（お）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）重（おも）ハ（ハ）毛（け）衣（い）を（を）か（か）ぶ（ぶ）つ（つ）け（け）て
お（お）世（よ）活（か）さ（さ）ぬ（ぬ）で（で）お（お）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）幸（さい）ハ（ハ）い（い）ま（ま）は（は）三（さん）と（と）も（も）あ（あ）ら（ら）ま（ま）い（い）中（ちゆう）の（の）
い（い）ろ（ろ）一（いち）ま（ま）せ（せ）ぬ（ぬ）ト（ト）の（の）時（とき）お（お）賤（せん）ハ（ハ）浴（ゆ）室（じゆう）の（の）て（て）幸（さい）ハ（ハ）い（い）ま（ま）は（は）三（さん）と（と）も（も）あ（あ）ら（ら）ま（ま）い（い）中（ちゆう）の（の）
ア（ア）お（お）風（かぜ）は（は）お（お）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）湯（ゆ）ま（ま）し（し）ヨ（ヨ）幸（さい）ハ（ハ）ア（ア）イ（イ）ヨ（ヨ）と（と）ま（ま）し（し）下（か）も（も）ア（ア）お（お）湯（ゆ）へ

お（お）遠（とほ）入（い）を（を）成（なり）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）重（おも）ハ（ハ）お（お）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）お（お）遠（とほ）入（い）を（を）成（なり）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）
ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）ト（ト）帯（おび）を（を）解（と）上（かみ）の（の）帯（おび）を（を）脱（ぬ）ハ（ハ）お（お）幸（さい）の（の）取（とり）で（で）後（ご）ふ（ふ）と（と）ま（ま）い（い）中（ちゆう）の（の）
お（お）浴（ゆ）衣（い）を（を）出（で）し（し）て（て）お（お）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）ヨ（ヨ）マ（マ）ア（ア）お（お）寒（さむ）い（い）ら（ら）浴（ゆ）室（じゆう）を（を）ま（ま）し（し）て
お（お）出（で）せ（せ）ぬ（ぬ）ま（ま）し（し）重（おも）ハ（ハ）た（た）ら（ら）浴（ゆ）衣（い）も（も）入（い）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）ト（ト）浴（ゆ）室（じゆう）の
方（かた）へ（へ）移（うつ）り（り）ま（ま）し（し）重（おも）ハ（ハ）ア（ア）手（て）湯（ゆ）を（を）揚（あ）ぐ（ぐ）と（と）直（ただ）に（に）給（たま）ひ（ひ）く（く）
お（お）幸（さい）美（み）保（ぼ）の（の）て（て）お（お）酒（さけ）を（を）出（で）し（し）て（て）お（お）臭（くさ）い（い）く（く）と（と）ま（ま）い（い）中（ちゆう）の（の）
上（かみ）ま（ま）つ（つ）り（り）て（て）お（お）臭（くさ）い（い）く（く）と（と）ま（ま）い（い）中（ちゆう）の（の）居（ゐ）る（る）度（ど）後（ご）へ（へ）幾（いく）と（と）夜（よ）通（と）く（く）火（ひ）の（の）給（たま）仕（し）
重（おも）ハ（ハ）お（お）ま（ま）せ（せ）ん（ん）ら（ら）有（あ）り（り）ま（ま）し（し）湯（ゆ）へ（へ）遠（とほ）入（い）の（の）て（て）お（お）酒（さけ）を（を）給（たま）ひ（ひ）く（く）

ひき 夕ふりて芝居の出しはせう子幸八五郎二年
ひき 必末芝居とび後ゆり見さるひんおぢあませんんアア三
去年吹上の観音さる小芝居が出来さうさる市川三
瀬川さる澤村さるのさる苗字の看板と出さうさる
おの役者一人も参りさるあさる可笑さるさる
あさト浴室へもさる分て行お幸が公の物さる色自然さる
あささるさるも放さる取扱ひ思ひがけさるさるさるける

元壽 又満宇佐喜卷之十了

光傳 又満宇佐喜卷之十一 一名准於半

江戸 狂訓亭主人著

第二十二回

幸泰 一重さんううて麻をさるらて風物でもめをとらけません
アアさるさるさるのさる記さるのさるハ子重さんトゆり記
さるして重三郎八目をさるらて記さる重ハホイとさるさ
さる 縁旁のさるさるハ一重さるさるさるさるさる
かるとさるさるして役の男ハ幸ハお花さんかお麻ののを

えんく 勝多(ま)のりまーしヨ 主 酒(さけ)が量(り)わん 松子(まつこ)もア
あうん(う)子(こ)幸(さい) アアニ(な)酒(さけ)も(ま)版(ばん)も(ま)夜(よ)で(で)喰(く)まーく(く)金(かね)後(ご)
酒(さけ)酌(しやく)可(か)あ(あ)る(る)こ(こ)せ(せ)ら(ら)で(で)勝(か)多(た)一(い)性(せい)げ(げ)れ(れ)私(わたくし)れ(れ)種(しゆ)く(く)感(かん)
云(い)ら(ら)し(し)こ(こ)を(を)ま(ま)り(り)て(て)性(せい)ま(ま)ー(ー)ん(ん) 主 数(かず)云(い)う(う)一(い)
子(こ)幸(さい)と(と)六(ろく)ど(ど)ん(ん)ま(ま)る(る)を(を) 子(こ)幸(さい) ア(ア)フ(フ)ウ(ウ)且(且)性(せい)が(が)同(どう)が(が)老(らう)さ(さ)る(る)は(は)
性(せい)を(を)あ(あ)け(け)て(て)正(せい)床(じやう)ぬ(ぬ)か(か)帰(か)り(り)ー(ー)や(や)て(て)異(い)ろ(ろ)そ(そ)ー(ー)て(て)且(且)性(せい)の(の)
ま(ま)り(り)ど(ど)ろ(ろ)風(ふう)形(かた)を(を)引(ひ)き(き)あ(あ)い(い)の(の)中(ちゆう)ふ(ふ)あ(あ)ら(ら)る(る)て(て)違(ちが)ひ(ひ)の(の)
あ(あ)ん(ん)の(の)と(と)ま(ま)り(り)ん(ん)ホ(ホ)ー(ー) 主 暖(あたた)む(む)の(の)が(が)何(なに)れ(れ)そ(そ)ん(ん)あ(あ)ふ(ふ)可(か)笑(わら)ふ(ふ)
し(し)の(の)子(こ)幸(さい) 一(い)それ(それ)ど(ど)ろ(ろ)で(で)も(も)茶(ちや)えん(えん)と(と)ま(ま)い(い)あ(あ)ら(ら)る(る)定(ぢやう)宗(そう)宗(そう)笑(わら)ふ(ふ)



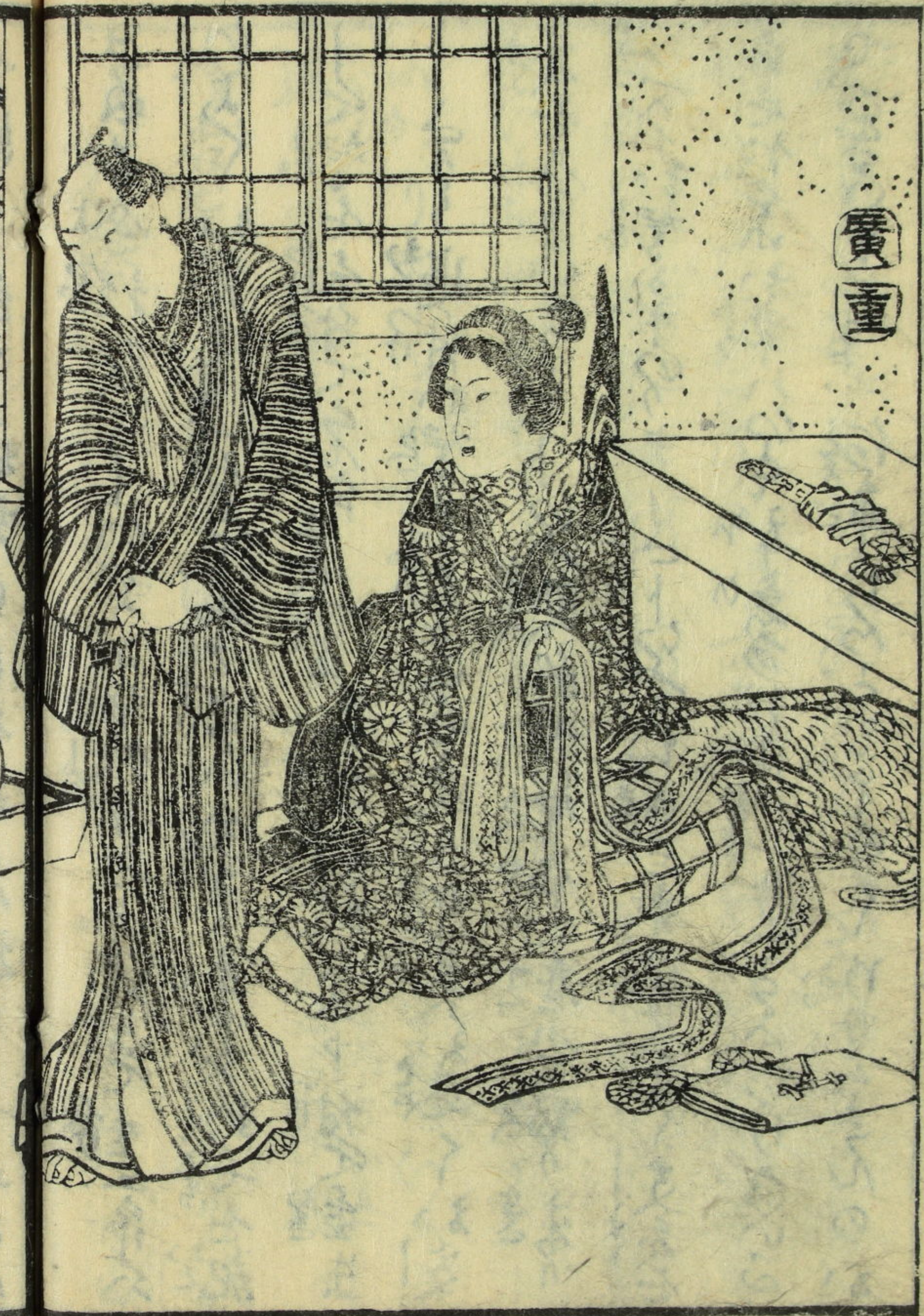
て(て)顔(かほ)を(を)く(く)も(も) 主 コ(コ)レ(レ)サ(サ)何(なに)が(が)せ(せ)ん(ん)あ(あ)ふ(ふ)可(か)笑(わら)ふ(ふ)し(し)の(の)ま(ま)り(り)ん(ん)ま(ま)
さ(さ)幸(さい)一(い)あ(あ)ん(ん)ど(ど)ろ(ろ)私(わたくし)ま(ま)ア(ア)ぞ(ぞ)ん(ん)ど(ど)ま(ま)えん(えん) 主 一(い)あ(あ)ら(ら)る(る)は(は)ほ(ほ)お(お)ー(ー)
て(て)ま(ま)り(り)ん(ん)子(こ)ト(ト)ま(ま)り(り)ん(ん)あ(あ)ら(ら)る(る)も(も)幸(さい)の(の)ま(ま)を(を)と(と)ら(ら)て(て)ひ(ひ)ら(ひ)く(く)も(も)ま(ま)り(り)ん(ん)
幸(さい)ア(ア)レ(レ)性(せい)ぞ(ぞ)あ(あ)ら(ら)る(る)と(と)し(し)け(け)ま(ま)せ(せ)ん(ん)ヨ(ヨ)ト(ト)の(の)ひ(ひ)ら(ひ)ら(ら)る(る) 主 三(さん)希(き)
の(の)自(みづか)ら(ら)あ(あ)ら(ら)る(る)て(て)居(ゐ)る(る)ま(ま)り(り)ん(ん)一(い)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)も(も)一(い)わ(わ)ら(ら)ん(ん)て(て)も(も)
何(なに)れ(れ)あ(あ)ら(ら)る(る)ま(ま)り(り)ん(ん)流(りゆう)ま(ま)お(お)師(し)匠(じゆう)さん(さん)が(が)あ(あ)ら(ら)る(る)も(も)志(し)こ(こ)わ(わ)く(く)の(の)ふ(ふ)
ら(ら)ん(ん)ま(ま)る(る)を(を)ら(ら)ひ(ひ)お(お)し(し)一(い)さ(さ)ら(ら)何(なに)れ(れ)う(う)と(と)ん(ん)ま(ま)屍(しかばね)が(が)来(こ)る(る)

さうもきつじおんてはアホお華ハ能う——さし憐れいよ
あんの恋まどくしお世にいゝるそのまゝいぬ男の
嬌小歌をおし——息をまうらぶあつめるそのあどけ
あた風姿おとろとまろやど物まろる重三帯ハお華の
脊中をおまごりあぐる——歌う——酒を——サア華さん何
かお白てあつろのびんおろあまおゆふするのを口惜いと
おりうてお在のうまい先の男ハ義理がまあるいとまろあ
快で泣口てお在のうろいもせんあまろあう——能令あぬ

やどおつても及びいりまうらう——トまらむてかうく——歌を
あぢ華へとうくくお小せんま若かあけきまものろ子——
そまうやア高正小是中てハ——幸ハイ男の例もトらぬけ
て俯向くお七重三帯ハなまろ子抱きおんとまろお
——も傍おの方よりあつて——人の強あるはきき
二人ハ膝をこねてく知へ——隣子別——あひあひ重三帯が
店の自代歌の詞を拭あがる——自代——トモと出ぬさぬが
ふん大敷がお春まうして——お春のおのけおをうらや大方お

尋のチのりりやアばいしまんこ 天へんくさうがら
 ちいてアそのとけハ 代い他でもばいしまんくさ公
 さぬのはさうまがまふさくありて是非ともさ
 このことば仰すまらうお跡を逃くけく 漸く夏でか目
 ふかりますこ内昔方さぬでも是うさぬトらみふ
 後く重三郎 せしそのやア何でも大へんくさあはぶか
 住居を出る時分う風形をいさうざらひあまひ
 代いそのお風形がましくありまして 代い其のすむ

さぬも金程むづりのやうな作ました下のまて 重三郎の
 りよくおぼろ宛 せしおやア出ふ今うさう 初七を配
 くがをを付てえな 代い五 モ夕先別初七ふ中付て金生
 へいさう追付お常とまのいせううらう せし其の速くお支
 後をみるます トは代い初七の常を居て候りま
 代いへいさう常がまのりまートは代い初三常のますくさまを
 めせわいふお華ひんらまのびお 代い初三のまのび
 へいさうまのびお 常はらうともしめく 代い初三のまの



お幸ハ門へ立ちて 然るも心 兄送りし 是を
此世の別と云ふも 果ぬ小夜夜 宿し
と後々 小おのひ 命を果敢みけれ

徳て後ハ幸ハ重三郎の役りを 今日や 望見也
と付わぶ 小おのひ 年も果敢みく 又まゝ
あつむの 甚ふるまで 善候あり ありのふふ
おのひにて 日毎ふ入 来る客のうち ありも 徳合風
の人と云ふ 此の 序ふ 重人の 町西を 妻し

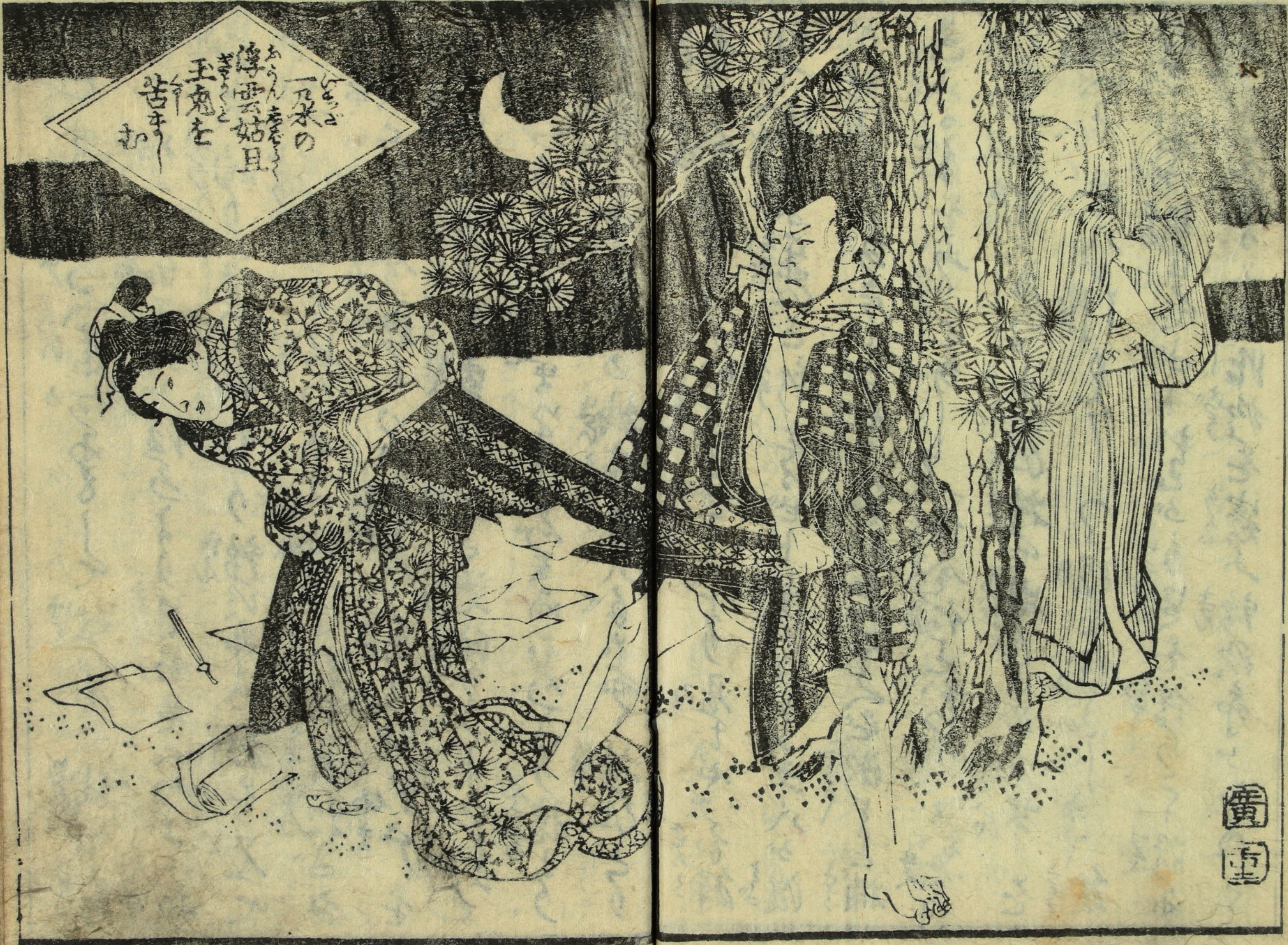
く 重三郎の 正所より ありし 人のあ
時 ありて 重三郎の 松子を ましけ
ども 是れと しの 候も 文ふ 知れ しが 故時一人
の旅人が 重三郎の 父の 人を 妻し 知り けり
まを 咄が 何日 母の 病を 小おのひ 重三郎が 旅先
より ありて 候りし 小おのひ 母の 病癒ハ
陰癒の 傷癒 也 重三郎が ありて 候りて 程も 小
おを 妻せし 候も 終ふ 其の 時 あり 又 其の

人とありけりか引續ひきつひて重三郎しんざうもその病ひやうを
を引續ひきつひて十日とせう立ちまざる由これもあはしく世よを
去さりし由よしも重三郎しんざうが病ひやうを治なすべくより後のち初はつの夜よに
ふもあやのゆのまゝひつめて後のち小重しんじゆう一ひとあり
しゆゆせあやをいあやと知しるさればまを治なすあり
まゝ息いきもあは一ひと伍ご一ひと件けんを治なすべくそとくふし
出いでゆふぞゆふあやの場まりゆむせうりつあやに
しが後のちて止とまむゆめあはゆば人の目めつまを

思おもひて重三郎しんざうが喜よろこばるるの由よしもわろの由よしも
その由よしも重三郎しんざうを治なすべくひけるゆゆ仔細しじゆのあはゆふあ
ゆのゆ男おとこ小重しんじゆうあはゆゆ生なまはるるゆゆ
居いるゆ小重しんじゆうの面おも容ようの重三郎しんざうゆを治なすべく
あはゆ思おもひて重三郎しんざうが病ひやうを治なすべくより後のち初はつの夜よに
そりゆ思おもひて重三郎しんざうが病ひやうを治なすべくより後のち初はつの夜よに
知しるゆ重三郎しんざうが病ひやうを治なすべくより後のち初はつの夜よに
まゝ思おもひて重三郎しんざうが病ひやうを治なすべくより後のち初はつの夜よに

けり乃もまて込六越て場末の一人文も稀くして
 ざん淋き近例町茶城一の月も薄暗く後ろより
 る歌の及実地地さおとをわれは先の晴かりゆく
 女の泣声あつめぞ怪しきあがう跡は糸糸を尻を
 ちのひ号ゆる子やんと寝るが十六七の及端を最勝にし
 荒男が抱きまくりて泣きけり此の程をさう一歌き
 おも娘ア抱を思つてえりおととさうう清玄のらひ
 ぐさのやうぶがけおれこんみふ答落このもえんま何

ちのち花田の田舎へ出ひらけ種々難儀をさるう
 ちも何年か花小宮う二文連ておひを遠かうとまじ
 愈へまふまよさけほどち花今ふつ本店へ引違え
 居るゑると連立さういふ程方ありさううかううと思ふ
 ちうち花ち花のち花と今日寺あふふり
 天の宛と飲んでえりくは糸地をつけ寺ううなる小宮
 合を帝を中引を足さす一花を熱く
 夏よりく遊々まこころやア空うさうなうとは



いんざ
一尺の
あらんまを
傳雲姑且
きくと
玉兔を
苦み
む

黄
土

やどきぶ小怪家るきを詔ひつお是までの塩子を
喰けがわ六清と侶俱ふあり一吹波を掲げり既
ふ老いその揚西へけお若流が来合せてけるの詔ひ
道通つがらのお若流ハ懐の紋布の金を棄つ是と
勢敵さきする事の毒さトリのふち糸糸繋ぎして後
冷糸を抱罷一程く女抱む程小姑且あつと息吹
えうと後手おまきんお若小怪家ハあつと入一玉一
おはおは信どなたまのりま一うがお若さんハとんぶるふ

あり合てひびくめお合あはしす一子エの年うん
あん一て下さのま一ヨ一てひびく痛もハあせせん
後一エのう何ともございせんおアそれおアお若ご
ハ知つと中どの玉かけ方ハ私が合はるで平八とんぬ
お程をよひきて一ときと土花の中お若くお在で疑ひ
をうけと長おさんごハ子ま時とらひ今款とらひ私
おハおお擲せ強ふお家の毒とも何とも中やうのま
うふ紋布お遠くお合を平八とんぬおはとんぬおア

あんとよりともし中決がごまのません子工をへイヤさう
りふ直界のあるかあとも知らば法控授もなるま〜
んどまを知らさう先判のとさ平八めハ遊ますいふ
に携いりるをらさうま〜と能令が〜ハ事さすとも平
八ハ事付て金を返してをせせうそのちハ事さす
をば金を付て居てゆふのま〜ト云ハ控て証知をを給
以希がりよめ 給ナニゆう金の買ごのまきさう〜
お嬢を連れさうお嬢のま〜お嬢〜お嬢がなまら〜
とて人さぬお金を失させて〜今日さぬらけて歸ません
それとよけが追うけても〜知らば〜
〜そのとさ〜のおお嬢ゆ〜
ねて来ませうお嬢ゆ〜
さるせ〜トさ〜止めても〜
中りふ控のて来てお嬢ゆ〜
〜中りふ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜

あんとよりともし中決がごまのません子工をへイヤさう
りふ直界のあるかあとも知らば法控授もなるま〜
んどまを知らさう先判のとさ平八めハ遊ますいふ
に携いりるをらさうま〜と能令が〜ハ事さすとも平
八ハ事付て金を返してをせせうそのちハ事さす
をば金を付て居てゆふのま〜ト云ハ控て証知をを給
以希がりよめ 給ナニゆう金の買ごのまきさう〜
お嬢を連れさうお嬢のま〜お嬢〜お嬢がなまら〜
とて人さぬお金を失させて〜今日さぬらけて歸ません
それとよけが追うけても〜知らば〜
〜そのとさ〜のおお嬢ゆ〜
ねて来ませうお嬢ゆ〜
さるせ〜トさ〜止めても〜
中りふ控のて来てお嬢ゆ〜
〜中りふ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜
お嬢ゆ〜

の名に續織袴を穿とちまはト是より自分住居の町
所を尋くくハ中分を尋ま尋ま果が其の續織袴
あるハ住居もけりか知さ居りまはせんあつた
おをを不軍くお頼まやかせトより軍く延出
せバハ叙父さんどうぞ怪家のあのかうお早く帰つて
お是ヨトのを後ろふを尋ま尋まハ逸見出してぞ
きりけく

光瀧 新話 多満宇佐喜卷之十一了

光瀧 新話 多満宇佐喜卷之十二 一名 准お半

江戸 狂訓亭主人著

第廿三回

備も續織袴を穿つハ神次希が医者の方へ兼取ふとく
仕より取ふ入るまでを解らされハ購もせはけ
小を教も既ふ二更に以神次希ハ最良一處女を連て
けりまはくハ為体何とやけしけれハ仔細を問ハ神次
希が今日をうけ途申ふハ喜ふ連し始めよりお母

の身みのううのい一いち仕しを道みちより帰かへる途とち中ちゆうでかか玉たまのあ艶えん美びを
見みままくくぐぐ救すけれんとと平へ八はちふふろろてて路ろを踏ふられれ
ううのう孝こう小せう業げつのい合あひひもも我われ布ふのい僅い小せう業げつのい合あひひもも
ももよよくくかか玉たまのあ叔しやく父ふのい老らう糸いと糸いとがい近ちか付づくくかか玉たまのあ身みのあ
煙け我がハハああららううのい合あひひとと命いのちををままららううをを母ははのい毒どく小せう業げつのい
糸いと糸いとハハ平へ八はちのあ跡あと追おひひててけけれれどど小せう業げつのい合あひひもも
ここのい路ろりりてて僅い小せう業げつのい合あひひもも最さい細さい中ちゆうのい地ぢ登とるる
糸いと糸いとのい子ことと母ははのい母ははのい家かのい知ち道だうをを斜ありり
糸いと糸いとのい子ことと母ははのい母ははのい家かのい知ち道だうをを斜ありり

ままくくのい教きやくびびてて 猶なほ一いちそれそれハハをを耳みみよりよりみみゆゆててああのい然ぜん
ままのい天てん下か時ときももままくくかか昔むかしははああのい目めのい多たららししめめんんのい
かかままりりがが付つくくのいああのい痛いたままででかかのい愛あいのい極ごく子こをを合あひひ
せせるるのいももああららううのい儀ぎがが在あるるかかとと知ち道だうをを居ゐるるがが命いのちふふくく
ててもも是ぜ非ひかかをを愛あいすすはは何なにもも無なききのいああららううのい巴へああららううのい奴ぬ
かかままととややううのい煙えん怖おそろろううととああららうう何なにもも無なききのいああららううのい奴ぬ
いいのい船ふねららいい積たかかふふああららうう休やすままりりししかかのい後あとのい糸いと糸いとをを何なにもも
ととももいいのい躰たふふのい教きやく會あひひをを途みちせせららううのいああららううのい積たかかふふつつけけがが後あと

弟ハけうち火体火をわらへ 業を怠らざらん父親の
 痛記の奴抱をきる也 又アッおれで置置が業の下でも痛
 ぶさせうら子 珍ナニもう業火大伴匡をいませうら七んあう
 そこの流し元ふ菜の茹このがあの等どううまを志わつて
 かいあるまの今私がお抱を出してお救會を造らうら 又ニ
 りうおあうも懐ひあをらして中たさるる 珍ナニサせんか
 るをららるのせ何年喰へおきまさいまやあのとまこち節
 おんが世話をせまをうらト是より後次弟ハ福徳と

版櫃を出しておふ後 一そのと 業をさうて 報ふ
 せあどさるうらふおあもせうくお救會を造らひそのあを
 とうら 種くは厄ぬあうのまうて 寔ふおまの毒ぞ
 ぶいませま 又それおひせも 叔父せんが平人ごんお進つて
 首尾よくお金を返して 是うと云うぶいしおまが
 お金かぬふくおれおれ わア 何故おませうねト
 業のちごらふおれを ああおまの叔父の お希まは
 せあおれいしおまが 是うて 何故おませうねト

も寔まことの本ほん意いあるをを類るいののままかかももいいままくくよりより道みち徳とくのの物ものを
おさおてて居ゐりりしががおお一い叔しやく父ふをを私わたくしににややアアおお番ばんおお仕しとといいひひ
かあるがが慥たつたとしてしてああららままたたああららままららにに行いひひままアア
代わりりももあありりまませんせん何なん年ねん私わたくしのの身みをを信しんじてして奉ほうじてして二に丈じやくのの金かねが
ああららままああららままをを信しんじてして方かたへへおお返かへししてしておおかかええららままののままたたああ
まましてしてまま神かみままおお入いるるををままららくくとといいがが一いままががううちちままうう
ららいいててははああららままああららままのの心こころをを汲ひみみててままいいりり
てて居ゐるるにに知しららぬぬ人ひととと生なまままししてして居ゐるる強つよががああららままのの甲かぶつち

斐ひががおお入いるる然しかるる考こうがが定じやくすすりりとといいははれれハハここれれくく無むがが度たぎのの
別べつ人ひとをを私わたくしにに来こてて来こりりまま内うちのの事ことをを私わたくしにに告つぐぐてておお二に五ご郎らうのの
方かたへへああげげらられれのの御ご也やもも出いででおおけけ仔こ細こハハけけがが性しやうとといいふふ
くく長ながいいるる也やアア及およぶぶ身みをを私わたくしににままららすすハハ一いままののトトいいふふ
つつ門かどへへおお入いりりとといいふふ由よしをを強つよくく希ねがふふ物ものををああららままららくくとといいふふをを信しんじてして
とといいふふ後あとのの事ことををああららままららくくとといいふふ私わたくしががああららままららくくとといいふふ由よしをを信しんじてして
ままららすすをを信しんじてしてままららすすとといいふふ私わたくしががああららままららくくとといいふふ由よしをを信しんじてして
信しんじてしてままららすすとといいふふ私わたくしががああららままららくくとといいふふ由よしをを信しんじてして
信しんじてしてままららすすとといいふふ私わたくしががああららままららくくとといいふふ由よしをを信しんじてして

由よ（おかしき）を愛あくせくるるににてて私わたくしがが女にををしして
けの壇の小こ難がた民たみををささせるるややううななりののででままでで私わたくしがが神かみま
せんを愛あふふるる事ことももせんを時ときどどととああららわ
ささすと世よとともも情なさけののととららひひまませんを金かねののりりはは持もつ
るるががああけけここららううけけおお壇のをを遠とほくく内うち室むろ人ひとささぬぬのの如ごとく
違ちがへへずずおお進すすまますすののヨよもも不ふ巧たかくく私わたくしハハ先ま刻ごころをを公こうふ
救すくははるるののとと平ひら八はちのの儀ぎののふふああららううでで何なに知し（信しん）ままるる
ままささのの如ごとくくをを救すくへへてて頂たまひひののささららううででけけをを汚けがれれまません

いいふふ候こう令れい私わたくしのの身みをを信しんずずもも何なに程ほどのの信しん思しひひのの如ごとくく知しまませ
んを可かくく慈あはれとともも一ひと旦たん人ひとのの思しふふああららううててけけをを汚けがれれお
おおてもも報むかひひののいいふふままななおおくくトトららひひああららうう後ごにに希まれの
けけをを信しんずずまま一ひと旦たんととももおおりり由よ後ごににのの信しん知し
よりより屏びん風ふうののけけ持もつつ如ごとくく可からら希まれままるるののちちよよららとと
信しんずずままののままををけけのの先ま刻ごころううままららううくくと思おもひ
てて居いまますす一ひと旦たんおおももいいととややららううららううららうう一ひと旦たんおおのの義ぎはは
ままららううととささららうう一ひと旦たん居いまますす一ひと旦たんおおのの義ぎははままららううとと思おもひ



廣重

實



愛く
この
梅梅

しをすくく 強なるは受らうて客をあらしめ
まてく 茶の位を伴ひつらむと感トけるは
おのりききあう物なきをせむを止めけ焼をひら
ふにさるまのり それにやむおきうをせまのり
もあつたをきりて何れにさ 六テ強次帝の
強小任まを 五 強六 強七 強八 強九 強十
一も防も実せし者より係細ありて強の
牌強次帝小流虫義用を習らせ申うと
おのりききあう物なきをせむを止めけ焼をひら

おのりききあう物なきをせむを止めけ焼をひら
ふにさるまのり それにやむおきうをせまのり
もあつたをきりて何れにさ 六テ強次帝の
強小任まを 五 強六 強七 強八 強九 強十
一も防も実せし者より係細ありて強の
牌強次帝小流虫義用を習らせ申うと
おのりききあう物なきをせむを止めけ焼をひら

ありたり あつちう 幸ふをば あつちう 憂へ あつちう お尋ふ あつちう たり あつちう けお後 あつちう を あつちう
知 あつちう ろ あつちう 先 あつちう 別 あつちう 業 あつちう 事 あつちう 仕 あつちう 布 あつちう の あつちう 金 あつちう を あつちう 束 あつちう 結 あつちう 納 あつちう り あつちう 途 あつちう 々 あつちう
仕 あつちう 舞 あつちう バ あつちう せ あつちう れ あつちう ば あつちう 前 あつちう の あつちう 方 あつちう の あつちう 美 あつちう 麗 あつちう の あつちう 舞 あつちう と あつちう ら あつちう り あつちう の あつちう じ あつちう か あつちう け あつちう 約 あつちう 束 あつちう
で あつちう り あつちう する あつちう ま あつちう の あつちう ト あつちう なる あつちう 道 あつちう して あつちう 希 あつちう 々 あつちう 様 あつちう な あつちう を あつちう うち あつちう ち あつちう 入 あつちう 忍 あつちう
且 あつちう 入 あつちう 心 あつちう を あつちう ち あつちう へ あつちう 然 あつちう る あつちう 事 あつちう して あつちう 下 あつちう され あつちう ば あつちう お あつちう ち あつちう ぐ あつちう ち あつちう ぬ あつちう
大 あつちう 仕 あつちう 合 あつちう せ あつちう 儀 あつちう 事 あつちう 々 あつちう け あつちう 月 あつちう が あつちう 経 あつちう 過 あつちう 希 あつちう 々 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう
ト あつちう なる あつちう 道 あつちう して あつちう 後 あつちう 次 あつちう 希 あつちう 々 あつちう 希 あつちう 々 あつちう 何 あつちう と あつちう ま あつちう なる あつちう 道 あつちう 一 あつちう ち あつちう ち あつちう
む あつちう け あつちう ば あつちう お あつちう ち あつちう なる あつちう 道 あつちう を あつちう ぬ あつちう げ あつちう ぬ あつちう 訣 あつちう を あつちう 教 あつちう ぬ あつちう べ あつちう 一 あつちう 母 あつちう て あつちう た あつちう ぐ あつちう ぬ あつちう ぬ あつちう
心 あつちう の あつちう 内 あつちう へ あつちう 六 あつちう 月 あつちう 下 あつちう 着 あつちう を あつちう や あつちう ぶ あつちう る あつちう 事 あつちう 一 あつちう 強 あつちう なる あつちう 事 あつちう ハ あつちう それ あつちう と
撞 あつちう 一 あつちう 七 あつちう ナ あつちう モ あつちう ヲ あつちう 強 あつちう 次 あつちう 希 あつちう 々 あつちう 他 あつちう ぬ あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう
お あつちう 尋 あつちう ぬ あつちう 事 あつちう 得 あつちう ぬ あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう
を あつちう あ あつちう 一 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう
声 あつちう と あつちう 伝 あつちう ぬ あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう
あ あつちう ぐ あつちう ち あつちう 門 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう を あつちう 引 あつちう ぬ あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう の あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう
よ あつちう り あつちう 傳 あつちう ぬ あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう 須 あつちう 臈 あつちう 々 あつちう 事 あつちう 一 あつちう 百 あつちう 十 あつちう け あつちう 。

第廿四回

おもふらも薄くきげぶを方ハ物なうが浪々の身を万幸
 せよとてきとること更お然てそ方お付しつるがあのその
 決ハ他でもあいつで物なうと別物おまこと物ハ明日も
 物なうお対面して我今いひ仔細をば妻く楽お
 相知り又若くあぬやう物事の用意をいのさせ
 よ更とのひくそうへめて表立て人をきり楽お
 腹系を許まづくとて店內におまづらう一色の金子
 をうてまき毛ゆて支交を調へると残りこゝろに思

りト妻細具お抱ぐれば始終を皆て物なうあつた
 ごと傍ふおあむ相りいこもあつたううく姑く
 あつて形容をあらうあ強者へまてく馬鹿の取柄のち
 がりり一毛といふも半次郎どのひとうとあつたぬぬ
 油切ゆい江珍次郎身前も早くおれをかせ
 寛お寛何とおれをもうくと置てませううあり
 難いごとのまをナニサおれをおれをば作決ハあり
 かせん叔辰さぬううごまの金子をまづあつた

もう一ませうトひまがら情より一色の金を生
し強をうし後一外ふひらの織布をえ出
是をが強冷糸の糸ふまあがら一まらの織布のりであ
吐しうごごのませが私がおる後うう昨晚がりがけお帰
多川ふ撥あいの用ひがごごいましううまを仕懸て成方へ
糸らうと夜を途中に強うあうは向ふうう一さんふ
強て来て私ふをううりひありましううう拘りぬ
あがうひまらつくまづもふ後掃うう糸巾のあの一色の

お金が差(おが)を情(あこ)うう撥(あち)ましううのをひあうと曲者(まが)か
目をやう見付て拾ひとり逃(あひ)出(だ)まうとある糸(いと)をむ私(わが)ら
引(ひ)つらまてよろしく一強(う)をえまをれは金(かね)沢(さわ)屋(や)を逃(あ)出(だ)
されと強(う)の平(へい)八(やち)でごごのませうう強(う)のゆめ屋(や)連(つ)れ
強(う)て強(う)くと金(かね)強(う)を強(う)いましうう私(わが)の強(う)とご金の
外(あ)ふは強(う)布(ふ)の金(かね)を強(う)持(も)て居(ゐ)ましうう是(こ)れハ強(う)福(ふ)く
強(う)で長(なが)松(まつ)の持(も)と居(ゐ)る金(かね)を強(う)強(う)て逃(あ)出(だ)す事(こと)の
中(な)かまらう長(なが)松(まつ)と私(わが)かおせうとを中(な)か金(かね)沢(さわ)屋(や)



けいどの海菜懐ひくぬしお昔の家のなまじり
を日守次第小毒く難くお屋敷の松子を
せよまうく一れが程あく海菜あつてト子細
具小物種り扱きくお昔のう芳を望みお昔ハ
何事も物なうお程さうの事あり保是まを
持てくことあればお難さうかくづつとく
ううくいふく難あれば何とぞ一生を樂小
ゆつて是後居同松小ぬくまのよりを云

けいど物なうもな程と思ひは海菜のうハ
と角もせうらふてトきひのき自ハ別れ
しかを後半次第お屋敷の松子を望みせ
お昔後の在家知くうハ古物の別後新小
お作を夢懐くてを如く違へうとる事
お昔その子を物なうの報知を昔お昔ハ
くは物ごとく限りあく物なうの物て用意の二十夜と
半次第より使えく一色の金ゆてお昔の仕と

^{いひつけ}しそ^{まじ}り^るべ^{ぎん}ん^る
 小倉付しそ^{まじ}り^るべ^{ぎん}ん^るが^ま心^を焼^く^らん^んて^まん^ん
 り^ふち^あく^いと^めら^るく^すみ^まよ^らる^こ
 ひ^しん^てる^まま^をぞ^違け^る

○作者曰く這編の十二巻ありて結局うの輝多川
 のち余がそのおもむき又お昔結成糸糸三糸が
 執念心の繁うりりなる怪波を鑑りゆん^と初め
 より思ひ定めて居すし小嘘の余りて戈星うねば
 矢端もよか出世の腹めて是を玉鬼の終とあり日

ろう^ちん^のう^をを^鑑りて^まん^ん
 せん^と輝^幼稚^壺の^為み^も今^を外^野を^左
 小^祀に^他者^の罪^を倭^かる^子あり^り看^官笑
 蘇^乃ま^まり

光傳 新話
 伊滿守佐喜卷之十二大尾



